

アモス書第6章1a、4-7節

テモテ書一第6章11-19節

ルカによる福音書第16章19-31節

本日の三つの聖書日課は、先週に引き続き地上の富に関わる事柄、ことに貧富の差の問題について語っています。

旧約日課は、先週に引き続きアモス書ですが、ここにも、富を求め、主なる神様の意思から離れている、北イスラエル王国の支配者層への批判があります。

「それゆえ、今や彼らは捕囚の列の先頭に行く。寝そべる者たちの酒宴も終わる」(アモス6:7)は、北イスラエル王国が、アッシリア帝国によって滅ぼされることと、指導者層である彼らの未来について語っているのでしょう。

福音書は、「ある金持ちと貧しきラザロ」の物語です。地上における貧富の差の問題を扱ったイエス様のたとえ話です。貧富の差に関する問いと解決は、1章のマリアの賛歌(ルカ1:46-55)がその内容としていることからわかる通り、ルカ福音書全体が持つ主題の一つです。

本日の使徒書も貧富の差に関する事柄を扱っています。日課は、「しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい」と始まっていますので、少しわかりにくいのですが、本日の箇所の前部分に「これらのこと」があり、そこに富への警告があります。そこには、「金持ちになろうとする者は、誘惑、畏、無分別で有害なさまざまな欲望に陥ります。その欲望が人を破滅と滅亡へと突き落とすのです。金銭の欲が諸悪の根源だからです。金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、さまざまな苦痛でわが身を刺し貫いた者たちもいます」(1テモテ6:9-10)と極めて具体的な、富に執着することが信仰を損なうことへつながるとい警告があります。これらのことを受けて、「しかし、神の人よ」とつながるのです。

この使徒書は、「テモテへの手紙一」とパウロが共労者であるテモテへあてた手紙となっています。それゆえ「神の人」は、テモテのことを称した表現ですが、すべてのキリスト者に向けて書いているととらえることが大切です。また、本日の最後、「テモテへの手紙一」の最後が、「この世で富んでいる人々に命じなさい。高ぶることなく、不確かな富に望みを置くのではなく、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。善を行い、良い行いに富み、物惜しみをせず、喜んで分け与えるように。真の命を得るために、未来に備えて自分のために良い土台を築き上げるようにと」(1テモテ6:17-19)とある通り、この手紙は、教会生活の様々なことを教え、間違った教えについての警告を語っていましたが、その最後の部分で、富に関する警告を信仰と結びつけて語っているということは注目すべき点です。教会の信仰は、その始まりからそのような視点を持っていたということの証であるからです。

さて、そのような視点の起源は、もちろん、イエス様の教えにあります。その教えの一つが、本日のたとえ話です。もっとも、アモス書がイエス様よりも五百

年以上前に貧富の差の問題について警告していた通り、富への執着が主なる神様への信仰を妨げること、貧富の差の解決と信仰とが結びつくこと、それらは『聖書』が継続して持っている課題です。その意味では、イエス様もその課題を継承しているということなのですが、本日のイエス様のたとえば、その課題の解決を、より明確に示しています。

まず前半部分（ルカ 16：19-26）で、地上では報われることのなかった貧しいラザロが、天上で報いを受け、地上では富を得ていた人が黄泉で苦しむという、復活信仰に基づいた逆転の希望を語ることがあります。しかし、その希望だけで生きることを求めてはいません。つまり、天国があるから、今の地上の課題（ことに貧富の差）については無関心でいいとは教えていないのです。後半部分（ルカ 16：27-31）で、アブラハムと黄泉に落ちた人との会話において、「もし、モーセと預言者に耳を傾けないならば、たとえ誰かが死者の中から復活しても、その言うことを聞き入れはしないだろう」と、モーセと預言者と称し、『聖書（旧約）』の重要性を再度主張しているからです。それは、全く新しい教えが語られたのではなく、また『聖書（旧約）』の内容を今まで通り繰り返すのではなく、イエス様が復活されたこと、その希望があるからこそ、『聖書（旧約）』に書かれた、律法をはじめとした様々な教えを、キリスト者が信仰者として実践することを求めているのです。

本日の特祷は、「全能の神よ、あなたは天と地を創造され、また御自分の姿に似せて、私たちを造られました」で始まります。この言葉は、使徒信条、ニケア信条をはじめとして、教会の信仰の大前提といえる言葉です。つまり、『聖書』の信仰は、天と地を創造された神様を、もう少し拡大して表現するならば、この世界の時間も空間も作られた神様を信じることから始まるのです。そして、信仰者は、その方の似姿であることを自覚することから始まるのです。本来ならば、その認識だけで、「感謝と敬う心」を持って歩み始めることができるはずなのですが、教会の歴史を考えるとときまたくそうではありません。また、「私たちが世界のすべてに御手の業を見出し」と特祷にある通り、課題はそもそも「貧富の差」の事柄だけではなく、つまり経済的に豊かになればよいということだけではなく、世界のあらゆる事柄に関わっているのです。もし、現代人が過去の人よりも進んだ点があるとするならば、この点について気付いたということでしょう。もちろん、その点に関する解決も全く進んでいません。

『聖書』に基づきイエス様を信じる人の集まりである教会、その教会ができることはわずかです。テモテへの手紙を書いて人も、ローマ帝国全体の社会改革などは念頭になかったと思います。ましてや、わたしたちと同じような世界認識をもって、世界全体の変革などはもちろん念頭になかったと思います。しかし、教会の集まりからまことの希望を世界中に広げる、そのことは真摯に課題としていたと思います。その課題は、今でも私たちの課題でもあります。その課題の達成方法は、それぞれの教会によって異なりますが、わたしたちの教会は、わたしたちの教会にこそ与えられた賜物と条件に則した方法で、取り組み続けたいと思います。